

Title	元代蒙漢合璧命令文の研究(二)
Author(s)	杉山, 正明
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 23 p. 35-p. 55
Issue Date	1991-03
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/19617">https://hdl.handle.net/11094/19617</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 元代蒙漢合璧命令文の研究 (二)

杉 山 正 明

＊本稿は本誌前号『内陸アジア言語の研究』5 (1989), 1990, pp. 1-31 に掲載された「元代蒙漢合璧命令文の研究 (一)」の続きである。本稿冒頭の番号は前稿からの通し番号であり、命令文リストおよび文献目録・略号は、前稿 pp. 24-31 に掲載されたものを踏まえる。

## 2 1335年の山東鄒県嶧山仙人宮トゴン=テムル聖旨碑

嶧山は、孟子の故郷で名高い山東省鄒県の東南およそ15km、見渡すかぎりの平原の中に突如、大地から湧き出したように聳え立っている。海拔は555m、周囲は10kmあまりという。奇岩・巨石が重なり合って一山を形成し、見るからに異様な雰囲気漂い、古くから神霊の地とされてきたのもよくわかる。『詩経』や『書経』禹貢にその名が登場するのをはじめ、秦の始皇の東巡の際、最初に刻石したいわゆる「嶧山刻石」で特に名高い<sup>(1)</sup>。元代には、全真教の拠点となり、仙人万寿宮のほか、いくつかの道観が山中各所に営まれ、「常に千指に盈つ」<sup>(2)</sup>ほどの道衆が聚居したという。その遺趾は今日もお目にする事ができる。山頂ちかくに、元統三年(1335)に順帝トゴン=テムル Toγon-Temür が発した蒙漢合璧命令文を刻する巨碑が現存する。碑陽には、上方およそ3/4の碑面を使ってパスパ文字蒙古文31行が刻され、のこる下方およそ1/4の碑面に直訳体白

(1) 李斯の書というのが、よく知られているように原石は唐代ですでになく、北宋期の唐拓による摹刻がいま西安碑林に現存するほか、元代以後しばしば重刻された。どれも秦代の原石には遠いといわれる。

(2) 朱象先撰、張仲寿書、李邦寧篆「明德真人道行碑」至治二年(1322)十一月望日立石。〔道略765-766〕

話風漢文による対訳31行が見える。漢訳の方はすでに蔡録 83<sup>8</sup>, 87頁に移録されているものの、蒙古語についてはこれまで知られていなかった。

明・清・民国時代の各種の石刻書や石刻目録類には、この碑はほとんど著録されていず、わずかに呉式芬『攷古録』巻19, 32葉裏に、「仙人万寿宮勅書。蒙古書。下層は正書。山東鄒県。元統三年七月十四日<sup>(3)</sup>」と見えるのが目を引く程度である。山東省全域にわたる現地調査をしたはずの『山左金石志』にも全く見えない。近刊の『道家金石略』1188頁には漢訳文が移録されているものの、蔡録からそのまま引用したものである。一方、碑陰についても、管見のかぎりでは、同じく『攷古録』巻19, 34葉裏に、「勅仙人万寿宮碑。陳繹曾の撰、並びに正書。山東鄒県。後至元二年二月。元統万寿宮勅書碑の陰」と著録されるのみである<sup>(4)</sup>。中国科学院北京天文台主編『中国地方志聯合目録』294-295 頁によれば、鄒県に関する地方志は、嘉靖『新脩兗州府鄒県地理誌』以後、民国鉛印本『鄒県地理志』まで、すべて八種が知られるが、そのうち筆者が直接に確認できた四種については、本碑について全く触れていない。概していえば、石刻書・地方志全般を通じて、嶧山の諸碑については、不思議なほど手薄いといわざるをえない<sup>(6)</sup>。誰にとっても魅力の的であるはずの秦始皇の「嶧山刻石」が存在しないことが周知であったため、かえってわざわざ峻険な嶧山に登ってまで他碑を採拓するほどもない、とされたためであろうか。蔡美彪の移録は北京大学に蔵されていた拓本に明らかにもとづくが、もし彼の移録文がなければ漢訳<sup>(7)</sup>

(3) 年次順に配列した『攷古録』を地域別に仕立てなおした『金石彙目分編』にも、その巻12, 35葉裏に同様の著録がある。

(4) 光緒『鄒県統志』巻10, 金石志下に、「元至元三年, 勅蔡繹山万寿宮碑。繹山に在り」と見えるのは、本碑碑陰を一年誤って著録したものであろう。

(5) 嘉靖『新脩兗州府鄒県地理誌』巻二・三・四には他書には見えない金元時代の碑刻が数多く移録されている。とりわけ、巻二, 古今記文, 山川類には、「秦嶧山碑」につづいて延祐九年(1322)冬十月立石にかかる里人劉之美撰「詔紀嶧山碑記」、および金の大定丙申歲(16年1176)の「鄒嶧山図記」の二碑が移録され、本碑に至るまでの嶧山の状況を知る貴重な手掛りとなる。

(6) 『攷古録』以外では、繆荃孫『藝風堂金石文字目』が嶧山関係の数碑(特に元碑)を著録する。ただし、本碑は見えない。

(7) 蔡美彪「北京大学文科研究所蔵元八思巴字碑拓序目」北京大学『国学季刊』7-3, 1950, 405。北京大学所蔵拓本は繆荃孫旧蔵のものを含むので、繆氏所蔵目録である前記の『藝風堂金石文字目』には本碑の名は見えないものの、蔡美彪が依拠した本碑拓本はあるいは繆氏旧蔵であったのかもしれない。

文すら知りえなかったわけであり、あらためて蔡録の有用さに敬意を表したい。

さて、本碑は碑陽・碑陰とも表面の磨滅がひどく、直接に碑石から刻字を読み取ることは難しい。もともと、本碑の文字の刻入はさほど深くはなかったらしいことは一見して容易に推測される。元代の碑刻はふつう、極めて堅牢な碑石に、しかも非常に強く深く刻されている。パスパ字の場合は特にその点がいちぢるしい。本碑は元代パスパ字刻入碑としては、珍しく浅い彫りであり、パスパ字・漢字とも一画ごとの線も必ずしも明瞭ではない。碑石・刻字とも見事な出来映のものが多く蒙漢合璧命令文碑の中では、文字の刻入という点に限っていえば、本碑はあまり立派な碑石とはいえない。本稿で呈示するパスパ字・漢字の移録は二種の碑陽拓本にもとづくものであるが、実のところ拓本からの判読でさえも決して容易でなかった。また、碑陰については、碑陽以上に磨滅が激しく、全く読み取ることができない文字のほうが多い。ほとんど意味を汲み採れない文面ではあるが、わずかに残る文字から判断すると、どうやら碑陽の内容と連動し、その雅文表現らしき箇所も認められる。参考のために、本稿末尾に移録文を添附する。

こうした磨滅による判読の困難さとは別に、本碑の際立った特徴は、パスパ字蒙古文と漢字訳文の双方に、他の蒙漢合璧命令文の諸碑にはほとんど見られない誤記・誤写、さらにはにわかには決定しがたい疑問点が認められることである。たとえば、パスパ字蒙古文24行目には、漢字「宮」を表わすものとして *gäun* と *gäun* の二種の表記が刻される。もとよりこれは *gäun* でなければならない。また、嶧山仙人万寿宮の代表者として名の挙がる李道実・呉志全・呉道泉のうち、後二者の称号中に *tuñ-wi* という全く同じ表記が見える。これでは二人とも「洞微」の称号を有していたことになってしまう。しかし、漢訳文面を見ると、呉志全は「洞微」だが、呉道泉は「通微」となっている。碑陰は既述のように読み取ることのできる文字が少ないが、この二人の称号については、幸いにもしっかりと判読できる。それによると、碑陰での二人の称号は碑陽漢訳文でのそれと同様である。さらに、後に掲げる元代嶧山関連の「嶧山爐

丹峪重修長生觀記」でも、吳志全の称号中に「洞微」の二字が確認でき、一方、<sup>(8)</sup>やはり後述の「増修集仙宮記」碑陰題名によって吳道泉についても「通微」の称号を帯びていたことが裏付けられる。つまり、パスパ字面22行目の二箇所に刻される tuñ-wi のうち、吳志全についてはそのとおりであるが、吳道泉に関しては「通微」の対音である t'uñ-wi と刻さなければならなかったはずである。

こうしたnとñ, tとt'といった程度の、いわばささいな誤写ないし誤刻は、通常の生活の場面ではしばしば起こりうることではあろう。ただし、蒙古語・直訳体漢訳・文語漢文のいずれを問わず、パスパ字で表記された元代命令文の碑刻・文書を通観すると、ひとつにはこうした命令文は蒙古訳史などのそれを専職とする政府機構の正式の吏員の手によって転写ないし書写されるのがふつうであること、そしてもうひとつには元代において特に大カアンの聖旨は至上の權威と実効とを発揮したからその転写・書写にあたっては極めて厳重・細心な注意が払われたと推測されること、このふたつの点から、本碑を除く他の大カアン命令文では、誤刻が頻出する特定の碑刻、および特殊な事情を背負っている或る種の語彙を別とすれば、<sup>(9)</sup>ふつうはこうしたささやかな誤りさえ、実はほとんど見られない。この点をとらえて、本碑のように元末になると、パスパ字による皇帝聖旨の書写・刻石に際しても、以前ほどの注意を払わなくても済むほどパスパ字が当たり前のものになったと解することができるのかもしれない。あるいは、命令文文書の作成や立碑という特別な事柄がいわば日常化して、気軽なミスも出現するようになったとも、いえるのかもしれない。

しかし、こうしたケアレス=ミスに近い誤りとは、次元の異なる問題が本碑には三箇所も見られる。それは、本来は漢語表現でしかありえない語句が、漢字音そのままをパスパ字に写し取った形で蒙古語原文の文脈の中で使用されて

(8) 「増修集仙宮記」碑陰題名では吳志全の称号が吳道泉と同じく「通微」となっている。ただし、並記される吳道泉が「吳志泉」と書かれているように、この碑については道略の移録文に不審点があり、この碑そのものの誤記か、あるいはむしろ道略の移録ミスかもしれない。

(9) 前稿14頁参照。

いることである。まず第一は、パスバ字面21行目に刻される čau-či>čü-či である。この語は漢訳文面22行目の「住持」の対音である。パスバ字面を先入観なしに眺めれば、čü-či の語はつづく李道実の称号に冠せられる肩書のひとつ、すなわち名詞と見えなくもない。名詞ならば、漢字音を転写して蒙古語の中に使ってもおかしくない。ところが、元代の蒙古語命令文一般の通例では、「-dür čü-či ~ に住持する」と動詞として見做さなければ解釈しにくい文脈である。例証として、本碑以外の蒙漢合璧命令文における相当箇所での用例を年次順に列挙すると、次のようである。

- 1 ネズミの歳（至元13年丙子，西暦1276）正月26日，龍門禹王廟マンガラ令旨碑。

Yü-qañ-měw-dür aquñ Gjañ jin-žin 禹王廟裏住持的姜真人

- 2 ウシの歳（至元26年乙丑，西暦1289；ないしは至元14年丁丑，西暦1277）正月25日，交城県石壁山玄中寺クビライ聖旨碑。

Ši-bi-zi-dur aquñ 'An sññ-lü 石壁寺有的安僧録

- 3 トラの歳（延祐元年甲寅，西暦1314）4月15日，真定路元氏県開化寺アユルバルワダ聖旨碑。

Kay-hu-zi süme-dür aquñ Tuñ-ji 'in-ben tay-ši 開化寺裏住持通濟英辯大師

- 4 トラの歳（同上）7月28日，盤屋重陽万寿宮アユルバルワダ聖旨碑。

Tay-čuñ-yañ wan-šiw gün-dür basa he-geñ gün-gön-dur aquñ sen-šññ-ud 大重陽萬壽宮裏並下院宮觀裏住的先生每

- 5 トラの歳（同上）7月28日，彰徳路安陽県善應儲祥宮アユルバルワダ聖旨碑。

Šen-'in žü-señ gün-dür aqu ti-dem Baw-γuo hen-jin γuñ-gew tay-ši 善應儲祥宮裏住持的提點葆和顯眞弘教大師

- 6 ウマの歳（延祐5年戊午，西暦1318）4月23日，邵陽県光国寺アユルバルワダ聖旨碑。

……ki'ed sümes-dür aqun Fu gjañ-jü ……等寺院裏住的福講主

- 7 トリの歳（至治元年辛酉，西暦1321）10月15日，瀋県天寧寺クンガロト  
ギェルツェン帝師法旨碑。

Ten-nin-zī sūme-dür aqu gjañ-jü Lan gei-zian 天寧寺裏住持的講  
主朗吉祥

- 8 トリの歳（同上）11月初10日，易州龍興觀ダギ皇太后懿旨碑。

……Ü-çuen gôn-dur aqun ti-dēm Uaŋ zin-sën 玉泉觀裏有的提點  
王進善

- 9 至元二年ネズミの歳（丙子，西暦1336）7月12日，許昌県天寶宮トゴン  
=テムル聖旨碑。

Ten-baw gūn-dür aqu Min-jin gyan-diŋ tay-ši 天寶宮裏有的明眞  
廣德大師

いずれも共通して「～dur (-dür) aqu(n) …… 某処にいる誰々」の蒙古語原文に対して，「〇〇(裏)住(持)(的)△△」ないしは「〇〇有(的)△△」の漢訳である。本碑の漢訳も「〇〇裏住持△△」の形であるから，上掲のパターンからはずれていない。翻って，本碑蒙古文だけをこうした慣例から切り離して眺めれば，既述のように *čü-či* を名詞と見て，「仙人万寿宮において，住持洞誠……李道実・明道……吳志全・通微……吳道泉をはじめとする道士たちに」と解することも言語上では許容されるではあろう。あるいは，言語上の問題とはせずに，「～にいるところの」を意味する *aqu(n)* を誤って落としたとの別解釈も完全に排除することはできないではあろう。蒙漢合璧命令文碑13例の中で，蒙古文面に *čü-či* が使われる例は，本碑以外にもう一例ある。それは，現在知られている蒙漢合璧命令文碑としては最も晚い至正十一年ウサギの歳（辛卯，西暦1351）2月28日附の盤屋大重陽万寿宮トゴン=テムル聖旨碑である。そこでは，聖旨を授与される焦德潤の漢字27字にもおよぶ長大な肩書のひとつとして，ちょうどそのなかほどの位置に見える。純粹に名詞である漢字「住持」を音写したものにすぎない。また，本碑蒙古文面の *čü-či* が，「住持する」の意

味で完全に蒙古語化しているならば、čü-či-kü(n) の形でなければならないであろう。要するに、今のところ、蒙古語に漢語「住持」が流入しているのか、あるいは単に漢語名詞の音写にすぎないのか、決定材料が不足している。ただし、モンゴル皇帝以下が発した蒙古語が原文であるという形式を一貫して厳守する蒙漢合璧命令文において、蒙古語 aqu(n) が使われるべき位置にまごうかたなき漢語「住持」の音写が平然と使われてしまっていることは事実であって、元代の文書作成やその刻石・立碑の問題にとどまらない大きな波紋を投げかけずにはおかない。

第二の点は、同じ21行目に、李道実の肩書の中で漢語「充」の音写 č'un>čun がそのまま使われていることである。これは、発令者の皇帝トゴン=テムル、ないし現実には蒙古語文の作成・書写者によって、李道実の長い称号・肩書のなかの一語と見做されたためではあろう。とはいえ、厳密に言えば「充」は漢訳面で明らかのように、本来は「充つ」という動詞でなければならないだろう。もとより、それを蒙古語で表現しようとすると文脈が繁雑になりすぎて、漢語の発音どおりにすべてを音写してしまう方が簡便であったことは事実であり、無理からぬところだが。

第三の点も、第二点と同種の問題である。22—23行目に、gäu č'un t( )>gü-čun-t( ) とあるのは、末尾が判読できないものの、明らかに漢訳面の「俱充提(擧)」に対応している。末尾の漢字は別碑によって「擧」であることが裏付けられるので、パスバ字も gäu č'un t(i-"au)>gü-čun-t(i-ü) であったことになる。漢文面の「俱充提擧」の意味は、呉志全と呉道泉の二人が「俱もに提擧に充てらる」ことであるから、この二人の肩書ではない。しかし、パスバ字蒙古文では漢字を音写しただけであり、もはや肩書と見分けがつかない。人名のあとに肩書がつづくわけではないので、誰の目にも異様なはずである。見た目の異様さは、前述の「čun 充」とは比較にならない。ただし、この点から、拡大解釈して、本碑では漢文面がまず作成され、次にパスバ字蒙古文がその訳

(10) 本碑の翌年に立石された「増修集仙宮記」碑陰では二人とも本宮提擧である。道略786頁。



として作られたとするのもゆきすぎであろう。次に述べるように、漢文面にも問題がある。前述の第二点も含め、本来は名詞としては扱えない語を漢字音写で済ませている問題は、むしろ翻訳の技術・技倆、ないしはこの特許状の作成・交付にいたる手続き上の問題にかかわると考える方が無理がないだろう。手続き上でいえば、本碑に刻される李道実・吳志全・吳道泉の姓名・称号・肩書・立場の字句は、当の嶧山仙人万寿宮からか、ないしはその上級の全真教団の長、さらには道教全体の管轄官庁である集賢院からの申請文面での表現に依拠しているはずだからである。

漢訳面で気になるのは、28行目である。仙人万寿宮所有の不動産・動産への負課を禁ずるこの箇所では、蒙古語では「……deče aliba alban qubčiri bu abtuqayı ～からすべての貢納・畜税を取るな」とあるにもかかわらず、漢訳では「……醋・麴、不揀甚麼、休科要者。……醋・麴は、なんでも、科要するな」となっていて、「-deče ～から」と「alban qubčiri アルバ税・クブチュル税」とが訳されていない。そもそも、不輸不納の特権の条項にかかわって、本碑蒙古文のように「-deče aliba alban qubčiri」の形を採るのは、他にはタツの歳（至元17年）11月初5日附とトラの歳（延祐元年）7月28日附の孫徳威あての、どちらも盤屋万寿宮に現存する両碑の2例しかない。その2例では、「……(等)、不揀甚麼差發、休要者」と漢訳されている。「-deče」の訳語を明示しないのは同じだが（「於……根底」と漢訳すれば語法上はよいが、間にはさまれる不動産・動産の列举が長すぎるため、句作りとしては避けたいのだろう）、「alba qubčiri」については「差發」とははっきり対訳語を示している。本碑漢訳では、「科要」にその意味を込めているのだろうか。

また、漢訳面31行目の「聖旨」は、蒙古文では正しく「Jarliq manu われらがおおせ」と書かれているのだから、「聖旨俺的」とすべきところである。

蒙古語面・漢訳面のいずれにおいても、本碑には粗雑な点、あるいは元代命令文の体例から逸脱する点が目につく。本碑の翌年にあたる後至元二年ネズミの歳（丙子、西暦1336）7月12日附の許昌県天寶宮トゴン=テムル聖旨碑もま

た、誤写・漏れが多い。このことは、既述のように普及・馴れの面も否定できないが、書写者・翻訳者が時代が降るにつれて低下したことも意味するのであろう。

体例上、本碑で目立つのは、文宗を示すジャヤガトゥ=カガンが先例として挙げられていること、免税・免役対象としてムスリム識者ダーネシュマンド danišmand（アラビア語のウラマー 'ulamā にあたるペルシア語）を意味する dašman が挙げられていないこと、および末尾の紀年に十二獣暦だけでなく、中国風の元号年次が並記されていることである。蒙古語原文単独でしか伝わらない命令文、および蒙古語原文を伴わない直訳体白話風漢文命令文までも視野に入れて検索すると、文宗は順帝の後至元三年丁丑（1337）まではその名が聖旨のなかに挙げられ、至正元年辛巳（1341）以降は全く見えなくなる。これは順帝トゴン=テムルによる文宗トク=テムル Toq-Temür への忌避に対応する。聖旨のなかにダーネシュマンドを免税・免役対象の一として挙げるかどうかは、歴代皇帝ごとに明確な態度の差が認められるが、順帝トゴン=テムル時代については同一年の発令でさえもまちまちであり、全く一貫していない。本碑に見えないからといって、この年にムスリム識者が居住するイスラーム施設についてはただの一箇所も免税・免役特権をもつところがなかったというわけではない。年次に中国風の元号が並記されるのは、今のところ蒙古語面では本碑からであるが、直訳体白話風漢文のみの命令文では、元貞二年猴兒年（丙申1296年。蔡録 38°, 40頁参照）から出現し、以後、断続して現われて、文宗トク=テムルの至順元年庚午（1330）からは、並記の場合と十二獣暦単記の場合とがあい半ばするようになる。

なお、本碑がその免税内容のなかに、地税と商税を意味する cañ と tamqa を述べないのは注目される。誤脱なのか、あるいは本当に嶧山仙人万寿宮はこの二種の基本税を免除してもらえなかったのか、まことに興味深い。

さて、元代の嶧山にかかわる碑刻は、管見の限り本碑以外に以下の9碑がある。

- 1 連観国撰・吉亨書并篆，「創建三清殿記」延祐二年（1315）八月十五日。  
〔道略1147-48〕
- 2 \*趙天麟撰・張仲寿書并篆，「白雲五華宮記」延祐五年（1318）三月二十八日。〔道略750-51〕
- 3 劉之美撰「詔祀嶧山殿記」延祐九年（1322）十月。〔嘉靖『新脩兗州府鄒縣地理誌』卷二〕
- 4 \*李之紹撰・劉賡書・趙孟頫篆，「仙人万寿宮重建記」至治二年（1322）十一月望日。〔道略762-63〕
- 5 \*鄧志明撰・趙子昂〔孟頫〕書・張濤齋〔仲寿〕篆，「崇德真人之記」至治壬戌（二年，1322）十一月十五日。〔道略763-64〕
- 6 \*朱象先撰・張仲寿書・李邦寧篆，「明德真人道行之碑」至治二年（1322）十一月望日。〔道略765-66〕
- 7 李之英文・李元彬書・孔思晦篆，「昭惠靈顯真君廟記」元統三年十一月吉日。〔道略1186-87〕
- 8 国祚篆額・陳繹曾撰・吳祥書，「增修集仙宮記」後至元二年（1336）季春中旬有五日。〔道略783-86〕
- 9 \*李元彬撰・蔡思中書并篆，「繹山爐丹峪重修長生觀記」至正四年（1344）十一月甲辰日。〔道略1206-07〕

（\*は筆者が拓本によって確認できたもの）

これらの諸碑を通読すると、嶧山は金元交替の混乱期に周辺里人の避難地となり、王重陽七弟子の一人劉長生の弟子である王貴実が庵居してから全真教団の一拠点となった。その後、その道統が史志道・李志椿とつづいて、本碑に見える李道実に至った。クビライ時代にあたる史志道のころ嶧山の各所に仙人万寿宮をはじめとする諸施設の營建が始まったが、李道実の時代になって急速に整備されたようである。この間、至元29年（1292）には史志道が寿王より明德真人を授号され、至大元年（1308）には旁系の王志順が同じく寿王より遠塵通妙純徳真人を授号され、さらに年次は不明だが、李志椿が脱脱大王より明真和陽

崇徳真人を授号された。先の寿王はトリチュ Toriču, のちの寿王はナイマンダイ Naimandai, 脱脱大王は有名なトクトガ Toqtoγ-a で、いずれも嶧山をその所轄にもつ益都路全体の投下領主であるオッチギン Otčigin 王家のその時の当主である。嶧山は李道実の時代に仙人万寿宮を本宮に山中各所に道観・庵廟が林立し、全盛を迎えた。本碑聖旨はまさしくその頂点を示すものであった。李道実が嶧山を超えて山東一円においてかなりな有力者であったらしいことは上掲の諸碑から窺い知れる。彼が立石の中心となった碑刻はいずれも、趙孟頫をはじめとする当代の著名人がかかわっているのもその一証である。

本碑のパスパ字蒙古文については、先に筆者が京都大学人文科学研究所蔵の拓本にもとづき英文で紹介したが [Sugiyama 1988], そのおりは漢訳面にはあまり言及しなかった。それは依拠した拓本のうち最下方が欠け、漢訳文全体を移録することができなかったためである。今回、あらたに碑陽全体を採拓した別種の拓本を利用する便に恵まれ、漢訳文の移録を試みるとともに、パスパ字蒙古文の再検証も行なった。その結果、蔡録の漢訳文の移録は筆者前稿で使用了拓本と同様に、おそらくは一部欠損などの不十分な拓本に依拠しており、時にはパスパ字面から漢字面を推測したのではないかとさえ考えられる箇所もあることがわかった。苦しい作業を試みた蔡美彪の労をここに銘記し、本稿では新拓本の写真を添えて大方の批正を仰ぎたい。

#### 蒙古語翻字

- 1 mōn-k'a deŋ-ri-yin k'u-č'un-dur
- 2 yekä su ǰa-li-yin i-h'än-dur
- 3 qa'an ǰar-liq ma-nu
- 4 č'ä-ri-u-dun no-yad-da č'ä-rig ha-ra-na ba-la-
- 5 qa-dun da-ru-qas-da no-yad-da yôr-č'i-
- 6 qun ya-bu-qun 'el-č'i-nä d'ul-qa-que
- 7 ǰar-liq

- 8 jīn-gis-qa-nu
- 9 "äo-k'äo-däe qa'a-nu
- 10 sä-č'an qa'a-nu
- 11 "-äöl-jäe-t'u qa'a-nu
- 12 k'äu-läug qa'a-nu
- 13 bu-yan-t'u qa'a-nu
- 14 (g)ä-g'an qa'a-nu
- 15 qu-(t'u)q-t'u qa'a-nu
- 16 ja-ya'a-t'u qa'a-nu
- 17 ren-č'an-dpal qa'a-nu ba jar-li-ud-dur do-yid 'er-k'ä-ud sän-šhi-nud  
"a-li-ba "al-ba qub-č'i-ri "äu-lu "äu-jen
- 18 deñ-ri-(yi) jal-ba-ri-ju hi-ru-är "äo-gun "a-t'u-qayi k'äg-däg-säd  
"a-ju-ueg 'e-du-ä bär bäo-ä-su 'u-ri-da-nu
- 19 jar-liq-un yo-su-ar "a-li-ba "al-ba qub-č'i-ri "äu-lu "äu-jen
- 20 deñ-ri-(yi) jal)-ba-ri-ju
- 21 bi-da-na h(i-ru-ä)r "äo-gun "ä-t'u-qayi k'an yi-du-lu thiñ-jiw  
jhiw-huän yi-san sän-žin wan-šiw-gäun-dur čäu-či tuñ-šin jin-ciñ  
t'uñ-huän tay-šhi č'uñ čuñ-jin
- 22 t(ay-dh)iy liñ-in jin-žin mun-hä-bun-cuñ du-ti-dem  
li-taw-ši miñ-taw-gueg-dhiy tuñ-wi tay-šhi u-ji-cuän  
tuñ-wi ji-häu tay-šhi u-taw-cuän gäu-č'uñ
- 23 t(i-"au) t'ä-ri-u-t'an sän-šhi-nud-dä u-ri-du yo-su-ar  
ba-ri-ju ya-bu-ayi
- 24 jar-liq "äög-bäe 'e-dä-nu gäun-gôn-dur gä-yid-dur "ä-nu 'el-č'in  
bu ba-u-t'u-qayi 'u-la'a ši-u-sun bu ba-ri-t'u-qayi 'e-dä-nu  
gäun-gôn-dur 'e-lä qa-ri-ya-tan jhañ-ten
- 25 qa-jar 'u-sun baq t'ä-gir-mäd gäy-den-k'u dem k'ä-bid

qa-la-un 'u-sun šir-gä k'äo-näôr-gä-dä-č'ä "a-li-ba  
 "al-ban qub-č'i-ri bu ab-t'u-qayi k'äd k'äd bär bol-ju  
 k'u

26 č'u bu k'ur-gä-t'u-gäe ya-u k'a-ji "a-nu buli-ju t'a-t'a-ju  
 bu ab-t'u-qayi 'e-dä ba-sa sän-ši-nud

27 ĵar-liq-t'an (k'ä)-ju yo-su "äu-gä-un "äue-läs bu "äue-läd-t'u-gäe  
 "äue-lä-du-ä-su "äu-lu-u "a-yu-qun mud

28 ĵar-liq ma-nu ("üä)n-tuñ qu-r-t'u-ar hön qa-qayi ĵil (na)-mu-run  
 t'ä-

29 ri-un za-ra-yin (ha)r-ban

30 dăôr-bä-nä šaň-du-da bu

31 k'ue-(dur) bi-č'i-bäe

# 蒙古語転写と逐語訳

1 mōnkā dēnri-yin kŭčün-dür  
 とこしえの 天 の 力 において

2 yēke su ĵali-yin 'ihe'en-dür  
 大いなる 威福の輝き の 加護 において

3 qa'an ĵarliq manu  
 カアンなる おおせ←われらの

4 čeri'tüd-ün noyad-da čerig haran-a bala-  
 諸軍 の ノヤンたちに 軍 人たちに 諸城

5 qad-un daruqas-da noyad-da yorči-  
 の ダルガたちに ノヤンたちに 行く

6 qun yabuqun élčin-e du'ulqaqu  
 ところの 行くところの 使者たちに 聞かせるところの

7 ĵarliq  
 おおせ

8 ĵiŋgis qan-u  
 チンギス カン の

- 9 Öködej qa'an-u  
オコデイ カアン の
- 10 Sečen qa'an-u  
セチェン カアン の
- 11 Öljeitü qa'an-u  
オルジェイト カアン の
- 12 Külüg qa'an-u  
クルク カアン の
- 13 Buyantu qa'an-u  
ブヤントゥ カアン の
- 14 (G)ege'en qa'an-u  
ゲゲエン カアン の
- 15 Qu(tu)qtu qa'an-u  
クトゥクトゥ カアン の
- 16 Ĵaya'atu qa'an-u  
ジャヤアトゥ カアン の
- 17 Rēnčen-dpal qa'an-u ba Ĵarli'ud-dur doyd id ērke'üd  
レンチェン パル カアン の および 諸命令 において トインたち エルケウンたち  
sen-šin-ud aliba alba qubčiri ülü üĴen  
先 生 たち すべての 貢納 畜税 見 ないで
- 18 dēnri-(yi) ĴalbariĴu hirü'er ögün atuqai ke'egdegsed  
天 を 祈り 祝福 与え あれかし といわれた  
aĴu'uj edü'e ber bö'esü uridan-u  
のであった 今 も であれば 先 の
- 19 Ĵarliq-un yosu'ar aliba alba qubčiri ülü üĴen  
おおせ の きまりどおりに すべての 貢納 畜税 見 ないで
- 20 dēnri-(yi Ĵal)bariĴu  
天 を 祈り
- 21 bidan-a h(irü'er) ögün atuqai ke'en Yi-du-lu Tīn-Ĵiw Ĵiw-hūen  
われら に 祝福 与え あれかし とて 益 都 路 滕 州 鄒 県  
Yi-šan Sen-šin wan-siw-gün-dür cū-či Tun-šin Ĵin-cin tun-hūen  
嶧 山 仙 人 万 寿 宮 にて 住 持 洞 誠 真 静 通 玄  
tay-ši cūn-čūn-Ĵin  
大 師 充 崇 真

22 t(ay-d)iy lin'in jin-zin mun-he bun-cun du-ti-dem  
大 徳 靈 隠 真 人 門 下 本 宗 都 提 点

Li-taw-si Min-taw gui-diy tun-wi tay-si  
李 道 実 明 道 貴 徳 洞 微 大 師

U-ji-cuen Tun-wi ji-hu tay-si U-taw-cuen gu-zun-  
吳 志 全 洞 微 致 虚 大 師 吳 道 泉 俱 充

23 t(i-ü) teri'üten sen-sin-ud-de uridu yosu'ar  
提(挙) 頭ともつ 先 生 たち に 先の きまりどおりに

bariju yabu'ai  
つかんで 行くところの

24 Jarliq ögbej eden-ü gün-gön-dur geyid-dür anu elçin bu  
おおせ さずけた これらの 宮 観 において 家々において←彼らの 使者たち な

ba'utuqai ula'a ši'üsün bu barituqai eden-ü gün-gön-dur  
下馬するように 駅伝馬 あてがいもの な つかむように これらの 宮 観 において

ele qariyatan jian-ten  
およそ 属するところの 莊 田

25 qajar usun baq tegirmed gey-dén-ku dem kebid  
地 水 園林 ひきうす 解 典 庫 店 みせ

qala'un usun širge könörge-deče aliba alban qubčiri  
温 水 醋 麵 から すべての 貢納 畜税

bu abtuqai ked ked ber bolju ku-  
な 取るように 誰 誰 でも なりと 力

26 ču bu kurgetügej ya'u keji anu buliju tataju bu  
な 及ぼすように いかなる もの←彼らの 奪い 引っぱって な

abtuqai éde basa sen-sin-ud  
取るように これらの また 先 生 たち

27 Jarliq-tan (ke'e)ju yosu üge'un üiles bu üiledtügej  
おおせをもつものたち といつて ことわり ないところの ことごと な 行なうように

üiledü'esü ülü'ü ayuqun müd  
行なえば でないか 恐れる そのことら

28 Jarliq manu (ye)n-tun qurtu'ar hön qaqa jil (na)mur-un te-  
おおせ←われらが 元 統 3 番目 年 おた 歳 秋 の あ

29 ri'un zara-yin (ha)rban  
たまの 月 の 10



30 dörben-e Šandu-da

4 に 上都 に

31 buküi-(dür) bičibej

いる 時に 書いた

# 蒙古語総訳

- 1 とこしえの天の力のもとに
- 2 大いなる威福の輝きの加護のもとに
- 3 カアンなるわれがおおせ。
  - 4 諸軍のノヤンたちに，軍人たちに，諸城
  - 5 のダルガたち・ノヤンたちに，ゆき
  - 6 かよう使者<sup>エルチ</sup>たちに聞かせる
- 7 おおせ
- 8 チンギス=カンの
- 9 オコデイ=カアンの
- 10 セチェン=カアンの
- 11 オルジェイトゥ=カアンの
- 12 クルク=カアンの
- 13 ブヤントゥ=カアンの
- 14 ゲゲエン=カアンの
- 15 クトゥクトゥ=カアンの
- 16 ジャヤアトゥ=カアンの
- 17 そしてレンチェンバル=カアンのおおせにおいて，<sup>トイン</sup>仏僧たち・ネストリ  
ウス教士たち・道士たちは，すべての貢納・畜税を顧みずに
- 18 天に祈り祝福をささげるように，といわれたのであった。今であっても，  
以前の
- 19 おおせのきまりどおりに，すべての貢納・畜税を顧みずに
- 20 天に祈り

- 21 われらに祝福をささげるように、と益都路滕州鄒県嶧山仙人万寿宮において住持（する）洞誠真静通玄大師充崇真
- 22 大徳靈隠真人門下本宗都提点李道実・明道貴徳洞微大師呉志全・通微致虚大師呉道泉俱充
- 23 提（挙）をはじめとする道士たちに以前のとおりにもってゆくべき
- 24 おおせをさずけた。これらの宮観、彼らの住居に使者たちは下馬しないように。駅伝馬・供応物とはならないように。これらの宮観におよそ属する荘田・
- 25 土地・園林・ひきうす・<sup>バーグ</sup>解典庫・<sup>しちや やどや</sup>店・みせ・浴場・醋・麴からどんな貢納・臨時徴収を取らないように。誰が誰であろうとも、力は
- 26 振わないように。彼らのどんなものでも、奪い引ったくったりして取らないように。またこれらの道士たちも、
- 27 おおせをもっているものたちだといって、無理なことごとを行なわないように。行なうと、それは恐ろしいぞ。
- 28 われらがおおせは、元統3年ブタ歳、秋の
- 29 初月の
- 30 14[日]に上都に
- 31 いる（時に）書いた。

#### 漢訳の移録

- 1 長生天氣力裏。
- 2 大福贍護助裏。
- 3 皇帝聖旨。軍官每根底。軍人每根底。管城子達魯花赤・官人
- 4 （根）（底）。往來使臣每根底
- 5 宣諭（的）

- 6 聖旨。
- 7 成吉思皇帝
- 8 月闕台皇帝
- 9 薛禪皇帝
- 10 完澤篤皇帝
- 11 曲律皇帝
- 12 普顏篤皇帝
- 13 潔堅皇帝
- 14 護都篤皇帝
- 15 扎牙篤皇帝
- 16 亦憐眞班皇帝聖旨。和尚・也里(可)(溫)・先生每。不(揀)甚麼差發。(休)
- 17 當者。告
- 18 天祝壽祈福者。麼道說來。如今依着在先
- 19 (聖)(旨)(體)例。不揀甚麼差(發)。休當者。(告)
- 20 天。
- 21 咱每根底祝壽祈(福)者。麼道。益都路滕州鄒縣繹山仙人萬壽
- 22 宮裏住持洞誠(眞)(人)通玄大師充崇眞大德靈隱眞人門
- 23 下本宗都提點李道實・明道貴德洞微大師吳志全・通微
- 24 致虛大師吳道泉。俱充提(舉)。爲頭先生每根底。依先( )( )(?)
- 25 把行的
- 26 聖旨與了也。這的每宮觀・房舍裏。使臣每休安下者。鋪馬・祇(應)
- 27 休着要者。但屬他每(宮)觀裏的疋田・水土・園林・碾磨・解(典)
- 28 庫・店舍・鋪席・浴堂・醋・麵。不揀甚麼。休科要者。不揀是誰。
- 休
- 29 倚( )力者。不揀甚麼他每的。休奪要者。更這先生每。有( )
- 30 聖旨麼道。無體例勾當。休做者。做呵。他每不怕那甚麼。
- 31 聖旨。元統三年猪□兒年七月十四日。上都有時分。寫來。

漢訳の日本語訳

- 1 長生の天の氣力にて
- 2 大福蔭の護助にて
- 3 皇帝の聖旨。軍官らに，軍人らに，城子<sup>まち</sup>を管する達魯花赤・官人ら
- 4 に，往来する使臣らに
- 5 宣諭する
- 6 聖旨。
- 7 成吉思皇帝，
- 8 月闊台皇帝，
- 9 薛禅皇帝，
- 10 完沢篤皇帝，
- 11 曲律皇帝，
- 12 普顔篤皇帝，
- 13 潔堅皇帝，
- 14 護都篤皇帝，
- 15 扎牙篤皇帝，
- 16 亦憐真班皇帝の聖旨[に]，和尚・也里可温・先生らは，いかなる差発に  
も
- 17 当てるな。
- 18 天に告し，寿を祝し福を祈れ，といった。いま以前の
- 19 聖旨の体例に依って，いかなる差発にも当てるな。
- 20 天に告し，
- 21 われらのために寿を祝し，福を祈れ，とて，益都路滕州鄒県繹山仙人万  
寿
- 22 宮に住持する洞誠真( )通玄大師にして崇真大德靈隱真人の門
- 23 下の本宗の都提点に充てらる李道実，明道貴德洞微大師の呉志全，

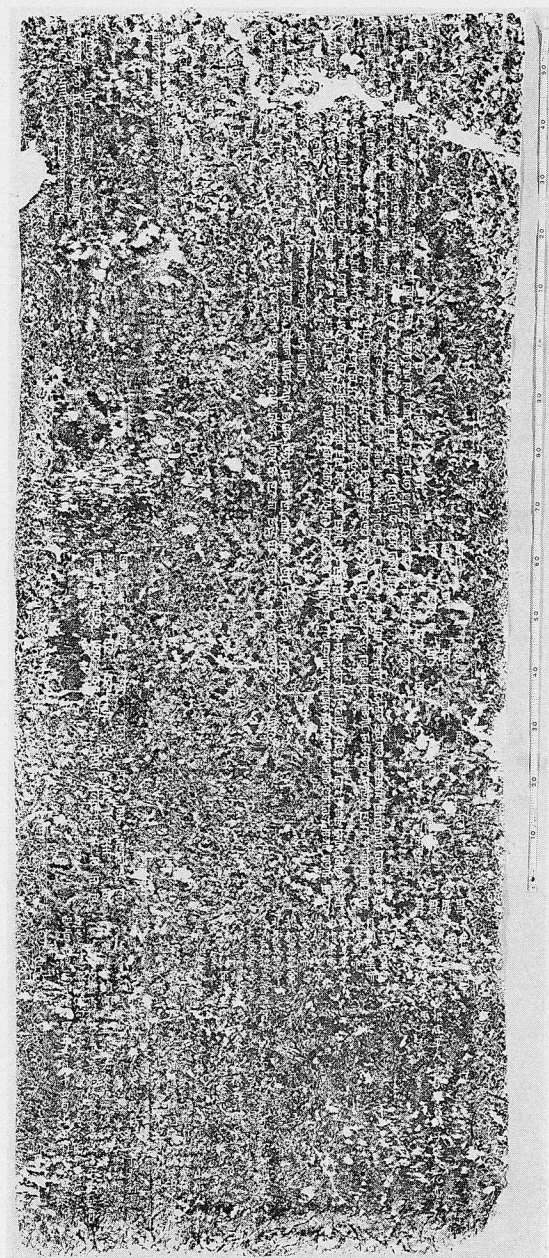
通微

- 24 致虚大師の呉道泉、俱もに提(挙)に充てらるるが頭となる先生らに、  
まへの[体例]に依って
- 25 <sup>もっ</sup>把て行く
- 26 聖旨を与えた。これらの宮観に、房舎に、使臣は安下するな。鋪馬・祇  
[応]は
- 27 <sup>もと</sup>要めるな。およそ彼らの[宮]観に属する莊田・水土・園林・碾磨・  
解[典]
- 28 庫・店舎・鋪席・浴堂・醋・麵は、いかなる[ものも]、科要するな。  
誰であっても、
- 29 [氣]力に倚るな。いかなる彼らのものも、奪い要るな。更に這<sup>と</sup>の先  
生らは、
- 30 聖旨が有るといって、体例の無い<sup>こと</sup>勾当<sup>す</sup>を<sup>し</sup>做るな。做たら、彼らは<sup>こわ</sup>怖くな  
いだろうか。
- 31 聖旨は、元統三年ブタ年の七月十四日、上都にいるときに書いた。

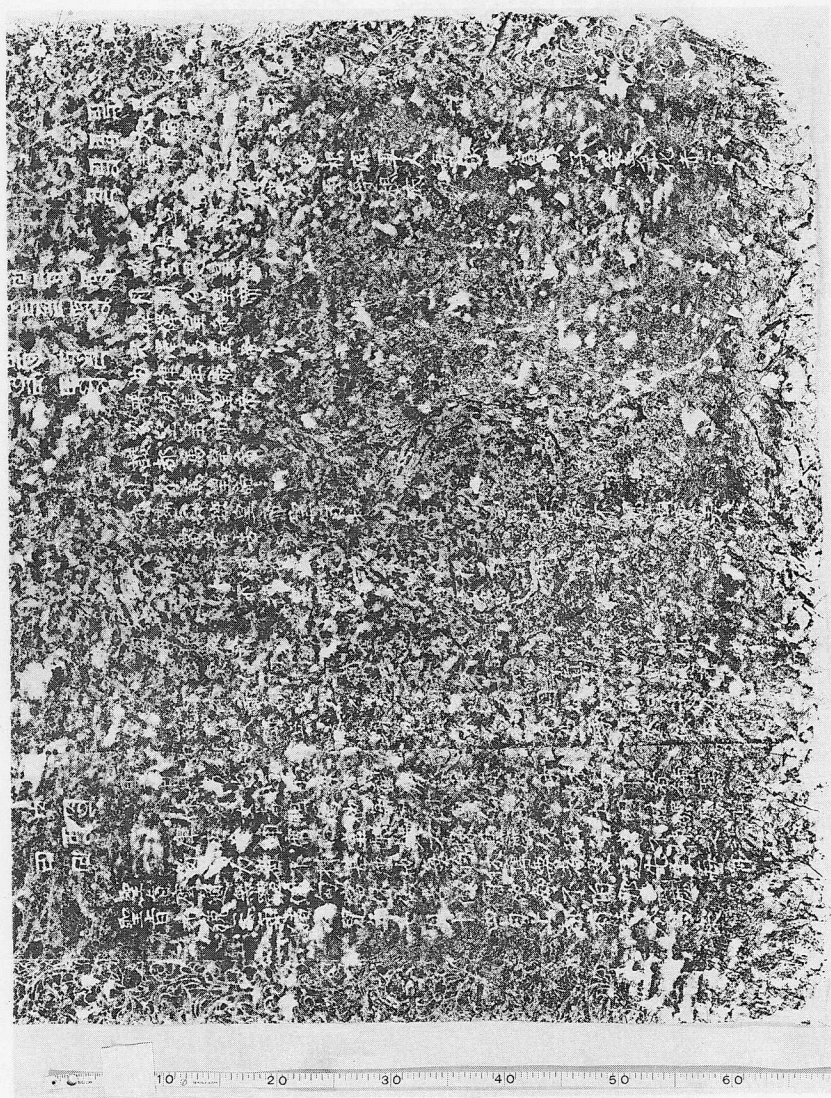
※( )は判読できないもの、□は空格をあらわす。( )で括りながら文字を記  
すものは、推測されるものを示す。

【碑陰の移録】

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
元	若	天	天	令	大師臣吳道泉	昊天上帝	皇帝	或	走	皇帝	元統	勅
二	夫道無爲民以寧	德	天	天	拜手		御	而師		曰	年七	
年	大子	眞	眞	天	首	下	臣請		特			
二	年表請	一	一	德也其	哉	昭	錫寶	諭		崇	平	
月				願以	其在	戊			而宮	修眞		
	國子	葉	葉		荒遊	大師臣李道實明道貴德洞微大師臣吳志全通微致虛		不	使駙			
	陳	山	山	其徒明眞	日以不朽			有	來凶頓內供	平		
	繹	陽仙人道士	陽仙人道士	靜冲和大師董道安來					園林澤	故常是		
	曾	寶鄉雲	寶鄉雲						(礪)磨	以祐		
	撰	王碧落聲	王碧落聲	辭乃					肆弛	朕躬惟鄒繹山仙人所居萬壽		
	并書								絲(徭)凡百孰何毋敢行騷			



図版1 嵯山仙人万寿宮聖旨碑の正面拓本



図版 2 嶧山仙人万寿宫圣旨碑の正面拓本のうち、下方の漢訳文